

民学コラボレーション学習の実践

～「お祭りネット共同体」をテーマに～

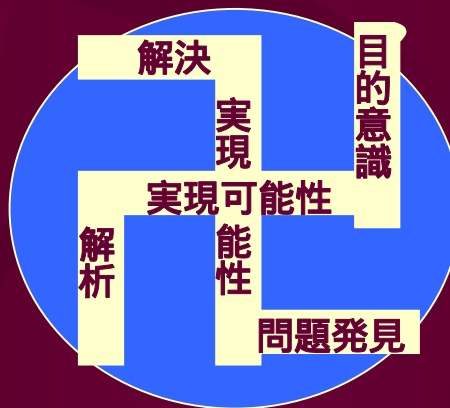
2007.01.31

明治大学兼任講師 飯箸泰宏

(問題発見ゼミ担当)

1. 今回の「民学コラボレーション学習」の狙い

- 前期は問題発見の理論的学習、後期は「民学コラボレーション学習」に進んだ。
- 一般に学生の社会性の欠落は進んでおり、社会的事象に関する問題発見能力の開発は、従前のゼミ形式を踏襲するだけでは不可能と判断した。
- 問題発見は、目的意識と解析・解決と円型に複合している。目的意識は実現可能性がないと生まれない。システム開発の能力は民に頼ることにした。



- 机上の空論から生々しい現実へ。

2. 今回の「民学コラボレーション」の仕掛け

- ゼミ生が会社訪問して、インタビューするのは、前年度許可されていた。
- 学外の方がゼミ室に立ち入るのは、許可が必要であり、レクチャーに限られていた。
- 履修していない当大学の学生が、ゼミにオブザーバ参加するのは伝統的に問題がないことがわかっていた。

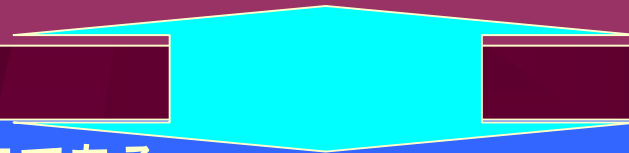
- ゼミ生はSH会社訪問をして共同企画を持ち込み、賛同を得て、SH社が企業として取り組む場合の骨子をインタビューした。SH社の社員らがインタビューに応えた。
- SH社には、ゼミの先輩など本学部の学生がアルバイトで勤務していたので、随時、ゼミにはこれら先輩たちにオブザーバ参加してもらって、民学の情報コミュニケーションをはかった。

3. 目的意識＝「お祭り共同体」

- 無理やりではあるが、「お祭り共同体」を目的意識に選んでみた。
 - 学生の企画には、ミニマムリクアメントがあるが、その他は自由。
 - SH社は営利企業なので利益に繋げる必要、がシバリとなっている。
 - 学生は企画を立て、SH社が採用するかどうかはSH社の自由。学生はSH社に採用されそうな企画を立てる必要に迫られる。
-
- なぜ、飯箸講師が「お祭り共同体」を取り上げたかは、なぜであるが、機会があれば明らかにする。

4.他大学の事例との違い

- 某K大学では、本年度文部科学省から多額の予算をいただいて、「コラボレーション学習」を進めている。
- 某K大学では、民間からの派遣メンバー(入社2-3年目)をプロジェクトリーダーに育てるために、学生を部下として配置する手法が採用されている。--某K大学の目的は民間からの派遣メンバーの職能教育である。
- 民間からの派遣メンバーには大学(文部科学省の予算)から日当が支払われている。



- 飯箸ゼミでは、予算ゼロである。
- 飯箸ゼミでは、学生の社会性育成と問題発見能力の向上が目的である。
- SH社からは、サーバ環境、人的資源などの提供をうけている。SH社は学生の企画を活用できる可能性があることをよしとしている。

5.成功か、失敗か

- 学生は企画に取り組めたか。
- 企画はSH社に取り上げられたか。
- 学生は企画能力を身に着けたか。
- 学生は問題の発見ができるようになったか。
- 学生は満足したか。
- 皆さんの評価は・・・？

終わり